

近世尾張のやきもの 資料紹介

— 正木焼 紀年銘資料 —

● 武部真木

近世尾張藩のやきものとの関係は、古くからの窯業地を含むこともあり他地域にみられない特異なものがある。藩制下の産業への強い関与はもとより、特に茶陶への関心が高い藩主は直接御庭窯を経営した。『をはりの花』には、藩主をはじめ職業的工人ではない30名以上の藩士・茶人などが卓越した作陶家として記されている。ここでは尾張藩士であった正木惣三郎と子伊織の制作による「正木焼」のうち、紀年銘をもつ作品を紹介する。

はじめに

「正木焼」は尾張藩士であった正木惣三郎と子伊織の制作による陶器である。正木焼初代の惣三郎（1801-50）は嘉永三年に五十歳で没した。天保13年に父の禄を継ぎ二百石取りとなり、後に六左衛門と改めた。勤仕の余暇に作陶を行い、その製品は黄瀬戸が多く人物を配した香合等を最も得意とした。印には「正木」と横書き、使用土の産地である愛知郡星崎に因む「星崎」印がある。瀬戸窯または名古屋城内の御深井窯で焼かせた。二代（1827-79）は幼名は半次郎、文政10年に生まれ、惣三郎の長子として父の禄を継いだ。藩主茂徳の頃に御小納戸役に進み、名を伊織と改める。風流茶儀を好み、陶技を父に学ぶ。絵を山本梅逸・上田桃逸に学び桃園、黄清、藤清と號した。尾張16代藩主義宣（1858-75）に陶法画技を教授する機会があり、以後は寵遇を受けたという。また江戸別邸に設けられた御庭焼の窯に一時関係したともいう。廃藩後には瀬戸の加藤五助、犬山焼の作十郎の作品に陶画を描いた。明治3年に隠居し、明治12年に犬山に没した*。

正木焼の印として知られているものは、小判または枠なし「正木」の横印、小判または丸に「正木」の縦印があり、その他丸に文様風の銘款、小判に「星崎」印がある**。

管見ではあるが、現在正木焼作品には茶碗、

水指のほか小人物を配した小型の置物と香合がよく知られている。主に後者の評価により著名である。

1. 正木焼 観音立像

背面に印および紀年銘刻書をもつ陶製の観音立像である（個人蔵資料 図1,2）。ベールのような衣を宝冠の上から被り、穏やかな表情と姿態は女性的に表現されている。三十三観音の化身のひとり、白衣観音菩薩をモデルとしたものと想像される。

資料は高さ36.4cm、胴部最大幅は9.7cm、底面で左右幅14.2cm、前後幅9.5cmを測る。胎土は砂粒を含まない白色の緻密な土を用い、肩部以上は中実、以下は底部まで筒状となっている。底面にかけて重心をとるように器壁は厚みを増し、下位では2.5～3.0cm程度となる。両手指そのものは作られず、袖布の下で組まれているかのように膨らみと襷の流れて表現されている。この部分の裏側に隠れる範囲の体部には穴があり、塞がれていない（図2写真）。

造形的な部分に観察を加えるとすれば、冠を戴く頭部から胸元付近までは宝珠の飾りなど精緻に細工が施されている。対称的に衣の柔らかな流れは宝冠の上から大胆に表現されており、裾の方では動きが大きくなっている。これにより頭部から胸部の肌理と衣で覆われた部分の異なる質感が効果的に表現されている。

* 『をはりの花』風の巻、『名古屋市史 人物編第一』『日本古陶銘款集 東海・甲信篇』

** 陶器全集刊行会 1944『陶器大辞典』寶雲舎

施釉方法をみると、まず全体に薄く鉄釉系の褐色釉が施される。次いで衣で覆われている部分は、上方からやや疎らに黄瀬戸釉が施される。頭頂部から正面側の衣にかけてやや厚みを残すよう掛けられてあり、背面と正面の裾付近では比較的薄くかすれた風合いに広がる。さらにその上から施される緑釉は、より狭い範囲に限定的に施され、衣の襞の動きをより軽快にみせている。正面の裾部分の襞に対しては水平ではなく、斜めに流すように掛けられている。

彫銘は、背面の中央付近に縦横 10.8×3.4cm の範囲に収まるもので、縦に「天保三年九月（正

木」印）造」、とあり、印のサイズは縦横 0.7×1.2cm、楕円形に近い瓢箪形のような枠内に右から左へ「正木」と読める。彫銘および印は土が柔らかいうちに、しかも施釉後に施されており、少なくとも印と重複する黄瀬戸釉施釉までの工程は乾燥の完了する以前に行われたことが判別できる。

本資料のような紀年銘と印を伴う作品には、加藤唐三郎家所蔵の黒筒茶碗が知られており、こちらは「天保丙申年冬赤津窯法印堂於作」の彫銘とともに「正木」横印が捺されてある*。「天保丙申年」は天保7年（1836）であり、天保3



図1 正木焼観音立像実測図(1/3)

*愛知県陶磁資料館 2001『尾張の茶道具 瀬戸・常滑の名工たちをめぐって』展示図録

年（1832）銘の本資料とともに初代惣三郎が30代半ば頃の制作となる。両者により「正木」横印と初代作品の対応関係がより明瞭に示されたといえよう。

2. 正木焼の制作背景について

「正木焼」の焼成は瀬戸窯または名古屋城内の御深井窯で行われたとされる。実際に瀬戸赤津の窯で焼成されたことは先述の黒筒茶碗の銘により明らかであるが、御深井窯との関係を直接示す作品は未だ明らかではない。

ただし御庭焼と御小納戸役の関連性に注目した仲野論文*の中で、藩士である正木焼初代の姿が捉えられている。『藩士名寄』に記された

惣三郎の役職は天保6年（1835）に「御目見より父数十年相勤め候に付き 召し出され新御番仰せ付」とあるのが初めてであり、天保12年（1841）4月13日には「表御錠口番並」、同月18日には「御供方」、同年11月晦日には「御小納戸並」と次第に藩主近くに勤めることになった。この間の天保10年には尾張十二代藩主^{なりたか}斉荘が襲封し、茶陶への関心の高い藩主により御深井窯は最も活発な時期を迎えた。「御深井丸御用」は天保6～12年まで毎年行われ**、また天保14年までには下屋敷（東山別邸）にも御庭焼の窯が開かれた***。

興味深い史料***は、天保13年（1842）江戸戸山屋敷庭内の窯出しの手伝いとして半次郎（後の伊織）の同行を願い出て断られたという



拓本縮尺1/2

図2 背面の印・刻書拓本と写真

* 仲野 1998

** 加藤唐三郎文書 No.435

*** 加藤唐三郎文書 No.69

**** 尾張徳川家文書 尾州御小納戸日記「江戸御小納戸日記」をひく

もので、父子での御庭焼への具体的な関与が認められる。このほかにも「御焼物御用のみに付き 北御庭口通行」を許される特例の扱いや、家督を継ぐ以前の惣三郎への「御焼物御用相勤め候に付き 金二百疋」などの下賜があり、役職においても「御小納戸本役」から「奥の番」へと進み、さらに天保15年12月1日には、正木惣三郎、平澤九郎（九郎焼初代）ともに御前直々に金二百疋が下賜されるなど、作陶を介した藩主との親密な関係が伝えられている。

そして弘化2年（1845）に藩主斉荘が36歳で歿すると、九郎も共に役職は奥向きより次第に遠ざけられたようである*。なお惣三郎は、斉荘歿後すぐ「先々不用につき銀祖母懷之御印」を返上した。御留土であった祖母懷土を示す印は御深井焼にも使用されており、御庭焼製品の品質において藩主より惣三郎がとりわけ重要な役割を任されていたのは明らかであろう。

紀年銘にある天保3年の前後の尾張藩では災害が相次いでいた。少し以前の文政7年（1824）には城下で大火があり、前津・富士見町一帯では1,400軒が焼失した。天保元年には矢田川が氾濫し、浸水域は城下の押切村の西側にまで及んだという。また天保3年の夏から秋にかけては早魃・暴風雨と自然災害が相次ぎ、広小路には窮民のための御救小屋が設置された。同年冬には今日でいうインフルエンザが大流行し、その年に琉球使節の通行もあったことから「琉球

風邪」と呼びおそれられたという。翌年の春には美濃西部を震源とした大地震があり、夏には尾張でも長雨が続き城下でも深刻な飢饉にみまわれた。東北地方を中心とした冷害による惨状が伝えられているその後数年にわたる天保期の大飢饉へと続く。

白衣観音は息災延命の修法の際の本尊でもあり、息災、除病、安産、育児の神として信仰されている。本資料はこのような時期に、おそらくは寺院や有力者などから注文を受け制作されたものと考えられる。

まとめ

「正木」横印と正木焼初代惣三郎との対応関係を示す新たな事例を提示することができた。これまで正木焼として知られてきたものは、初代・二代ともに精緻な人物造形を配した香合などの器種や茶碗が中心である。茶碗・水指を除くと長さ・幅ともに8.0cmを超えるものは少なく、名古屋市博物館所蔵の正木焼宝船置物（長さ37.6cm、高さ18.7cm）とともに大型品は極めて稀である。また人物像そのものが大きく作られていることが、正木焼では特別な作例とみられる。

本稿執筆に際し、資料実見についてご配慮とご教授等いただきました江崎 武氏・小澤一弘氏にはここに御礼申し上げます。

参考文献

- 大河内定夫 1973 「加藤唐三郎文書による 御深井焼考」『近世の瀬戸』大阪市立美術館・根津美術館・徳川美術館
 仲野泰裕 1991 「御庭焼と御用窯の世界」『江戸時代を彩る御庭焼と御用窯の世界』愛知県陶磁資料館展示図録
 仲野泰裕 1991 「御庭焼と御用窯について」『陶磁資料館研究紀要 10』
 仲野泰裕 1993 「尾張藩の御庭焼と御窯屋」『陶磁資料館研究紀要 12』
 仲野泰裕 1998 「尾張藩御庭焼と御小納戸役」『植崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
 井上喜久男 1999 「近世尾張の窯業生産と茶の湯の陶芸」『茶の湯とやきもの 尾張・三河の茶人たちをめぐって』愛知県陶磁資料館展示図録
 丸栄スカイル画廊 1984 『江戸から明治 尾張のやきもの展』
 名古屋市博物館 1997 『名古屋市博物館館蔵品目録 第2分冊 絵画・彫刻・工芸編』
 谷口事務所 2000 モントリオール美術館所蔵クレマンソー・コレクション「香合の美」展示図録
 名古屋市 2001 『新修 名古屋市史』本文編 第十巻 年表
 名古屋市 1980 『名古屋市史 人物編 第一』
 瀬戸市史編纂委員会 1992 『瀬戸近世文書集 第三集』
 瀬戸市 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇五』
 陶器全集刊行会 1932 『をはりの花』『陶器全集 第一巻』
 陶器全集刊行会 1939 『日本古陶銘款集 東海・甲信篇』宝雲舎

* 「御書院番」「御普請役半役」（『藩士名寄』）